構文交替の日英対照から分かること

工藤和也

1. 目的

本稿は、語彙意味論の観点から、英語において観察される多様な構文交替現象を、対応する日本語の例と比較し、構文交替に関する両言語の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。さらに、これまで英語を中心に構築されてきた構文交替の理論について、日本語の考察を踏まえて再検討し、理論の修正や拡張の必要性を論じることで、言語間比較から言語の普遍性と個別性に関する重要な示唆が得られることを示す。

2. 使役自他交替

使役自他交替とは、(1)のように動詞の自他交替に使役(causation)の概念が関わるものを指す。Levin and Rappaport Hovav (1995: 108) は、(2)のように、(1a)の他動詞の動作主(x)が意味構造内で存在量子化(existential quantification)されることで束縛され、統語構造に具現化されないようになるため、(1b)の自動詞が派生すると分析している。

(1) a. Janet broke the cup. b. The cup broke.

(2) [[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME *BROKEN*]] → [[φ DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME *BROKEN*]]

しかし、動詞の形態から派生の方向性が容易に推測できる日本語では、他動詞の自動詞化に関して、少なくとも以下の 2 種類の形態素が関与していることが分かる（影山 1996: 183）。

(3) a. -e-：割る→割れる、折る→折れる b. -ar-：植える→植わる、集める→集まる

影山 (1996: 145) は、(3b)の-ar-という形態素を用いた自動詞化は、(2)と同様の派生をたどるが、(3a)の-e-を使った自動詞化は、(4)のように、使役主(x)を変化対象(y)と同定することで派生すると主張している。

(4) [x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]] → [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

両者の違いは、(3a)は外的要因がなくても成立する事態を表すのに対し、(3b)は事態の成立に外的要因が必要なことである。このことは、自動詞が表す事態を「勝手に」で修飾できるかどうかで確かめられる（影山 1996: 189）。

(5) a. 勝手に、窓が割れた。 b. *勝手に、庭に木が植わった。

また、日本語の場合、結果事象を引き起こすものが使役主のような個体(THING)であるのか、状態や行為などの出来事(EVENT)であるのかによって、他動詞化の可否が変わる場合がある（影山 1996: 196）。

(6) a. 家が建つ。→｛大工／*持ち家願望｝が家を建てる。b. 花が枯れる。→｛子供／日照り｝が花を枯らす。

英語の他動詞は、出来事を主語にする無生物主語構文が発達しており（例：The explosion broke the window.）、主語が人でも、John *unintentionally* broke the window.のように、出来事と解釈される（[[EVENT John ACT] CAUSE [...]]）場合もある。これらのことを考え合わせると、英語で他動詞から自動詞への使役自他交替が起こるのは、A) 主語が個体(THING)で、B) 使役主が対象と同定され、対象が自ら変化を引き起こすと考えられる（つまり、[[THING x=y] CAUSE [...]]]の意味構造を持つ）ときに限られるのではないかという見通しが立つ。

3. 場所格交替

場所格交替とは、動作主、主題、場所の 3 項をとる動詞の目的語に主題が現れるか、場所が現れるかが交替する現象である。先行研究では、(7)の spray のような動詞は、主題が目的語になる構文では＜主題の移動＞を表し、場所が目的語になる構文では＜場所の状態変化＞を表すと考えられている。一方、(8)の pour や(9)の cover のような交替しない動詞は、語彙的にどちらかの結果事象が欠けていると分析されることが多い（岸本 2001 など）。

(7) a. Jack sprayed paint on the wall. b. Jack sprayed the wall with paint.

(8) a. Tamara poured water into the bowl. b. *Tamara poured the bowl with water.

(9) a. *June covered the blanket over the baby. b. June covered the baby with the blanket.

しかし、この考え方は日本語の場所格交替の例を見ると間違いであることが判明する。特に、日本語では、英語では場所を目的語にとる構文にしか生起しない動詞がしばしば交替する。

(10) タンクに水を満たす／タンクを水で満たす *fill water into the tank/fill the tank with water
壁に絵を飾る／壁を絵で飾る *decorate pictures on the wall/decorate the wall with pictures
部屋におもちゃを散らかす／部屋をおもちゃで散らかす *litter toys around the room/litter the room with toys

(10)のように、日本語では英語と違って、「物理的に場所をいっぱいにする」あるいは「心理的に場所の状態を評価する」という意味を表す動詞が交替する傾向がある。＜主題の移動＞と＜場所の状態変化＞の両方を表すことが場所格交替の語彙的な条件だとすると、これらの動詞はこの条件を備えていることになる。

英語でも、結果の取消可能性のテストを行うと、pour 型の動詞は＜場所の状態変化＞を含意しないのに対し、

cover 型の動詞は＜主題の移動＞と＜場所の状態変化＞の両方の事象を含意することが分かる。

(11) a. #Tamara poured water into the bowl, but none of the water moved.
b. Tamara poured water into the bowl, but the bowl was empty (because it had a hole in it). （工藤 2015a: 64）

(12) a. #Bill filled the tank with water, but none of the water moved.
b. #Bill filled the tank with water, but the tank was empty (because it had a hole in it). （工藤 2015a: 65）

このことから、英語の場所格交替における意味構造と統語構造との対応関係は次のように整理できる。まず、交替する動詞は、(13a)の意味構造から(13b)と(13c)の 2 つの統語構造を具現化できる。(13a)には＜主題の移動＞([y MOVE TO z])と＜場所の状態変化＞([BECOME [z BE <STATE>]])の両方の結果事象が含まれ、このうち前者を統語構造に対応させたものが(13b)、後者を対応させたものが(13c)である。これに対し、pour 型の動詞は、＜主題の移動＞は表すが、＜場所の状態変化＞の意味を表さないため、(13b)の統語構造は具現化できるが、(13c)の統語構造は具現化できない。最後に、cover型の動詞は、交替動詞と同様に(13a)の意味構造を持つが、言語個別の理由により、(13b)の統語構造を具現化できないことになる。

(13) a. 意味構造：[[x ACT ON y] CAUSE [[y MOVE TO z] BECOME [z BE <STATE>]]]
b. 統語構造①：$[_{vP}$ x $[_{v'}$ v_{ACT} $[_{VP}$ y $[_{V'}$ V_{MOVE} $[_{PP}$ P_{TO} z]]]]]
c. 統語構造②：$[_{vP}$ x $[_{v'}$ v_{ACT} $[_{VP}$ z $[_{V'}$ $V_{BE\ <STATE>}$]]]]

4. 与格交替

与格交替とは、動作主、主題、着点の 3 項をとる動詞の第一目的語に主題が現れるか、着点が現れるかが交替する現象である。先行研究では、John sent the box to Ann.のような与格構文は＜主題の移動＞を表し、John sent Ann the box.のような二重目的語構文は＜主題の所有＞を表すと分析されている（Pinker 1989 など）。

しかし、Rappaport Hovav and Levin (2008) は、与格交替の各構文には論理的含意の差はないと主張している。実際、give 型の動詞では、どちらの構文でも＜主題の所有＞ が含意され、後続文による取り消しが許容されない。

(14) a. #My aunt gave/lent/loaned my brother some money for new skis, but he never got it.
b. #My aunt gave/lent/loaned some money to my brother for new skis, but he never got it.
(Rappaport Hovav and Levin 2008: 146)

工藤 (2015b) は、日本語の 3 項動詞を、＜所有＞の概念を持つかどうか、＜移動＞の概念を持つかどうかという 2 つの基準で 4 種類に分類できるとし、英語の give や lend に対応し、＜所有＞の概念のみを持つ「あげる」や「貸す」に関して、次のような意味構造と統語構造との対応関係を提案している。

(15) a. 意味構造：[[x ACT] CAUSE [BECOME [z HAVE y]]]
b. 統語構造：$[_{vP}$ x $[_{v'}$ v_{ACT} $[_{VP}$ z $[_{V'}$ V_{HAVE} y]]]]

一方、send に対応する「送る」には、＜所有＞の概念も＜移動＞の概念も含まれるため、場所格交替と同様、次のような意味構造と統語構造との 1 対 2 の対応関係が生じることになる。

(16) a. 意味構造：[[x ACT] CAUSE [[y MOVE TO z] BECOME [z HAVE y]]]
b. 統語構造①：$[_{vP}$ x $[_{v'}$ v_{ACT} $[_{VP}$ y $[_{V'}$ V_{MOVE} $[_{PP}$ P_{TO} z]]]]]
c. 統語構造②：$[_{vP}$ x $[_{v'}$ v_{ACT} $[_{VP}$ z $[_{V'}$ V_{HAVE} y]]]]

このような日本語の考察を踏まえて英語の与格交替を振り返ると、英語でも send のように＜移動＞と＜所有＞の両方の概念を持つ動詞が与格交替に参与することはごく自然であるが、give や lend のように＜所有＞の概念しか持たない動詞がなぜ与格構文に生起するのかについては、理論的にさらなる説明が必要である。

5. まとめ

以上、本稿は、構文交替を特定の言語だけで捉えることの限界を指摘し、言語間比較により新たな視点が得られることを主張した。英語を中心に作られた理論は必ずしも日本語には適用できず、日本語の考察を踏まえることで理論の説明力が向上すると思われる。本稿で示したように、日英比較から言語の普遍性と個別性に関する理解が深まることがあるので、言語間比較は言語現象の多様性と共通性を考える上で非常に重要である。

主要参考文献

影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版.／工藤和也 (2015a)「構文交替と項の具現化：生成語彙論的アプローチ」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』46–71. 開拓社.／工藤和也 (2015b)「日本語 3 項動詞文の統語構造」『龍谷紀要』36, 75-89.／Levin, B. & M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*. MIT Press.／Rappaport Hovav, M. & B. Levin (2008) The English dative alternation: The case for verb sensitivity. *J. Linguistics* 44, 129–167.